

平成28年度 第2回 図書館協議会報告

- 1 日 時：平成29年1月27日（金）午前10時～12時
- 2 場 所：おおづ図書館 1階 集会室
- 3 出席者：委員 松岡征一郎、江口竜一、太田昭子、岩村優子、高本浩、
高本梢、吉田ひとみ、齊藤真、阪梨善行（9名）
齊藤教育長、市原教育部長、後藤生涯学習課長
事務局 大久保、宮野

4 議題

- (1) 第三次大津町子ども読書活動推進計画（案）について
別紙資料により説明（事務局）

質疑応答

意見

「第1章2大津町の現状」のところで、「1か月に何冊くらいの本を読みますか」という設問に対して、0冊なのは、大津町の子どもたちが8.7%、熊本県のアンケートでは15.4%になっています。この数字だけを見れば、大津町はよくやっているように見えますが、主旨としてはそれでも1冊も読まない子どもたちをまだまだ減らしていかなければならない、さらなる取り組みが必要である、ということだと思しますので、そのような文章を最後に入れた方が分かりやすいと思います。

答弁

今後より努力をしていかなければならないということをお願いしたいと思います。

意見

アンケートについて、高校生は入っていないようですが、高校生が入ってくるともっと下がるのではないかと思います。現在の数字だけを見ると良い結果に見えますが、高校生も含めると実際はそうでもないのではないかなと思います。

質疑

どこの学校にアンケートをお願いするかはどうやって決めたのでしょうか。

答弁

中学校は2校しかないため、北部地域である北中、反対に小学校は大津中校

区である大津小にお願いしています。

質疑

地域を分けて決めた、と考えれば良いのでしょうか。

答弁

地域に偏りがないように、小学校と中学校で校区を分けて取りました。

意見

学校によって取り組みが違っているので、偏りがなく公平にするのであれば、全校にした方が、平均が分かりやすいのではないのでしょうか。これが全てではないということ、私たちも分かっているからいけない。一部の学校だけのことなので、大津町全体の子どものことではないということ、これを把握して、これから先のことを考えなければならないということですね。

答弁

すべての学校にアンケートを取るには準備期間も足りなかったと思います。あくまでも指標ということで、ご理解いただければと思います。

先ほど委員からもありましたように、アンケートでは一見良い結果に見えますが、数字だけを見るのではなくまだまだこれから取り組んでいかなければならない、という風につながっていかねばなりませんので、そのようにご理解いただければと思います。

意見

こういった状況で取ったアンケートかということ、きちんと理解しておくことが大切だと思います。アンケート結果は少し軽く見ておかないと、この数字を基本にしてしまうとちょっと違うかなと思います。

意見

学校ごとに差が出てくるのは当然だと思います。ひとつのサンプルとして考えた方がよいのではないかと思います。

質疑

家庭読書チャレンジ会の内容について教えてください。

答弁

毎年7月から10月までの間、家族で何冊本を読めるかな、という会で、冊数を競ったりするわけではなく、ただ家族でこれだけ読めたね、という会です。やり方については、今後もっとみんながやってみようという取り組みにしていきたいと思っています。

意見

家庭読書というのは他のことにもつながっていくと思います。読書を家庭にどのように取り入れていくかということが問題になっているとも思うので、せ

っかく取り組まれているのだから、そのことにつなげていけるようになると思います。

意見

家庭読書は各小学校でもそれぞれ取り組まれています。そういった活動を図書館の展示コーナーで紹介したりすると、こんなことをされているんだな、と興味を持つ方もいらっしゃるのではないかと思います。

質疑

「第2章3計画の対象」について。対象年齢が18歳以下としてありますが、全体を見ると高校生までを対象としているように思います。さまざまな事情で19歳の高校生もいます。他の計画を見てみると国の定めには「おおむね18歳以下」とありましたので、そういった表現の方が適切ではないかと思います。また、「第2章4計画の期間」の2行目はどのような意味でしょうか。

答弁

「3対象」に関しては「おおむね」を加えた表現の方が良いかと思います。「4期間」に関しては、今後学習指導要領の改正が行われたときに、この計画の内容も一部変更する可能性があるということで入れております。ただ、分かりづらい表現になっているので、「場合によっては改正する可能性があります」というような表現に修正したいと思います。

質疑

第3章1(2)に「レファレンス」という言葉が出てきます。ほかにも「ヤングアダルト」などの言葉が出てきますが、図書館の中では使われている言葉でも一般的にはなじみのない言葉もあります。合志市の計画のように用語解説を付けた方が読みやすいと思います。

第3章1(3)の「学校の取り組み」の中に「必読書や推薦図書のリストを活用する」とありますが、このリストは現在どのような形のものがあるのかを教えてください。

第3章3の「図書館の取組」の中に「民間団体への団体貸し出し」とありますが、「民間団体」とはどのような団体を指すのでしょうか。

答弁

「必読書や推薦図書のリスト」については、あるかどうかは各学校によって違っていると思いますので、「このリスト」というものが具体的にありません。学校に尋ねながらこの文言を使うかは検討していきたいです。

「民間団体」は、現在学童保育や福祉施設などに多く貸し出しをしています。

意見

「必読書や推薦図書のリスト」については、自分自身子育ての中でどういった方を与えればいいのか迷うことが多くあったため、図書館にそういった年代ごとのおすすめのリストがあると助かるなど思ったところでした。

「民間団体」については、家庭文庫との連携があるのかと思ってお尋ねしました。

答弁

「レファレンスサービス」や「キャリア教育」など一般的でない言葉については、注釈というよりその場にカッコ書きで解説を入れた方が分かりやすいと思います。

質疑

第3章2(1)の「学校の取り組み」の中に「相互貸借」という言葉が出てきますが、現在学校図書館間で相互貸借は行われているのでしょうか。

答弁

全くないわけではないかと思いますが、調べ学習で使う時期や人気の本などはやはり重なりますので、現在はほとんどないかと思っています。

おおづ図書館から学校へ貸し出しをしているのは相互貸借ではなく団体貸出という形で2ヶ月間貸し出しを行っています。しかし、県立図書館などでもそれぞれ子ども文庫や団体貸出などの制度がありますので、そういったさまざまな制度もぜひ活用していただきたいという意味で、「相互貸借」と「団体貸出」両方の言葉を入れたいと思っています。

質疑

他の学校にどのような本があるか分かるようになっていきますか？

答弁

現在は、学校図書館のシステム上で他の学校の蔵書が見られるようにはなっていません。以前はネットワークでつながっていましたが、つながっていることによる不具合が多く発生してしまい、データを整理するために一度ネットワークを切っています。何か必要な本があればその都度他の学校に確認していただいています。

意見

学校になくても町の図書館にたくさんあります。孫も、家にたくさん子ども向けの本がありますが、それは読まずに図書館で借りています。蔵書の数も多いですし、種類も多くあります。まずは学校の図書館に行き本や読書の喜びを見つけて町の図書館に来てくれるようになれば、子どもたちの読書への意欲も定着化していくと思います。読書の習慣を身に着けた子どもは「何をしようか」

と迷うことはありません。読む本はたくさんありますから。読書をするために早く勉強を片付けるなどという習慣を付けたり、ゲームやテレビもありますがそれよりも読書となるような家庭環境にしていくことが必要だと思います。

意見

第3章1(1)の枠の中に「良書」という言葉がありますが、とてもひっかかりません。この表現は考えた方が良くと思います。自分にとっては良い本でも他の人にとっては違うこともあります。学校図書館に勤務していた頃、校長先生がウルトラマンの本を寄贈されたことがあります。これはちょっと、と思いましたが、ある1年生の男の子が見つめて「それはぼくの本」と言うようになりました。その子は図書の時も読み聞かせは絶対に聞かない子でしたが、ウルトラマンの本を見てからは「この本はぼくの本だから絶対ここに置いておいてね」と言って毎日図書室に通い、2ヵ月くらいすると、図書時間に自分が絵本を選んで他の子に読んであげるという風に変わっていきました。それを見て、これはちょっと、と思うような本でも、その子にとっては導入となる立派な本であることがあるということが分かりました。こういうこともあるので、ちょっと表現を変えられないかなと思います。

第3章1(3)の「図書館の取り組み」に「調べもの学習等への学校図書館への支援」とありますが、ここは「学校図書館を利活用した学習の支援」というように変えた方が良くと思います。先生方に学校図書館を理解して活用してもらわないと話になりませんので、啓発するという意味でも、もう少し言葉に膨らみを持たせられないかなと思います。

同じページの「学校の取り組み」の中の「必読書や推薦図書」についても、言葉が良いかどうか。また、学校図書館は予算がとても限られていますので、そういった本を全て揃えるまでにはいきません。図書館で、学校の授業に合わせた教科書掲載図書などを揃えたり、どういった本が必要か先生方に聞いたり、そういったことを学校図書館にアドバイスをいただいた方が良くかなと思います。

同じところに「読書感想文・読書感想画の指導に努めます」とありますが、読書感想文はとても難しいです。間違えると「感想文を書かなくてはならないので本を読まなくてはならない」となります。子どもにとってはとても負担になるのではと思います。家庭環境もいろいろありますので、子どもがより本好きになるような取り組みをしていけたらと思います。

現在大津町は、中学校図書館は正職員が配置されていますが、小学校は臨時職員です。公共図書館の前に、初めて出会う図書館が学校図書館です。そこに人がいるということがとても大切です。現在、小学校の司書は勤務時間が短い

ので、学校によっては朝閉まっているところもあります。それがとても不公平だな、と思います。30分でもいいので、勤務時間が長くなればな、と思います。

意見

学校図書館というのは非常に大切な場だと思います。また、朝の10分でも良いので、本を読む時間を学校で確保するのは大事なことだと思います。ものを考える力がなければ伸びていかない。小さいころから蓄えられた豊かな土壌がなければ根は張りません。根が生えて行って芽が生えます。上に出ているものだけが目に見えますが、そのためにはものすごくたくさんの根が張っています。そういう意味では、読書力や常識など新聞を読んだりして身に着けていくことが大切だと思います。読書をしてきた人は想像力がありますから、いじめなどもしないのではないのでしょうか。

質疑

以前から「読み聞かせ」という言葉が使われますが、最近「読み語り」という表現が使われていると聞きます。現在一般的にはどちらが使われているのかわからないので、確認をしていただければと思います。

「全ての子どもたちに」ということで考えられている計画ですが、地理的に来られない子どもたちも数的には多いと思います。そういった子どもたちに対して、移動図書館以外で何か対策をされているのでしょうか。

第3章3の「広報啓発」について、保護者向けのメールマガジンなどを発行することによって啓発できないかと思いました。新着情報など直接届けるには良い方法かなと思います。

答弁

「読み聞かせ」という言葉についてですが、「読み語り」という言葉が出て来てはおりますが、まだ一般的には「読み聞かせ」という言葉が使われているように思います。「読んで聞かせる」という意味ではなく「読ませてね、聞かせてね」という意味があるとも聞いたことがあります。どちらの言葉が良いか検討します。

図書館に来ることができない子どもたちへの対策ですが、移動図書館の巡回と、各地でボランティアさんによるおはなし会は行っていただいておりますが、それ以外は特に行っていません。今後検討していきたいと思います。

広報啓発に関してですが、12月から、町立幼稚園に保護者向けの本の紹介のおたよりを配布しています。メールマガジンに関してですが、図書館のシステムの機能上できるようになっておりますので、これも検討していきたいと思っております。

意見

大津町には「おはなしマン」をはじめ父親の読み聞かせが行われています。「読みメンプロジェクト」を行っているところもあると思います。大津町でも、役場の職員の方や男性の方が学校で読み聞かせをされています。それは大津町の宝だと思います。何か行えればと思います。

意見

先ほど読書感想画・感想文について意見が出ていました。私が家庭文庫をすすめる中で感じたことは、読書感想文を書けるようになる前の段階が必要ではないかということです。家庭文庫に5、6人の子どもたちが来て「宿題で読書感想文が出たけど何かいい本がない？」と聞いてきました。「今までに自分が読んで面白かった本について、みんなで少し話してごらん」と言うと、みんなで輪になって話し出しました。中には家庭文庫にない本もありましたが、学校などで借りて読んだようです。何週間か経ったあと、またみんなで「ここがおもしろかった」「ここはどのように思った」など子どもたちがいろんなことを言っていたので「みんなが思ったことを、長くなくてもいいから、書いてみんなで読みあっては？」と提案すると、子どもたちの発案で、家庭文庫で読書感想文大会をすることになりました。そうやって自発的に書くことになってことを思い出しました。読書感想文の指導といっても、文章を書く指導なのか、本に対する想いを書かせる指導なのか、それもまた違ってきますので、いかがかなと思います。

意見

感想ですが、アンケートで本を読むのが嫌いというパーセントが中学生は増えています。小学生から中学生になる中で何があったのかな、と思いました。また、中高生という年代はどうしても興味が読書以外のところにいてしまいます。友だち関係でもいろいろ出てきますが、テレビやゲームなどそういったものが共通の話題となることが多いと思います。読書が共通の話題となるような、1冊の本についてフランクに友だちと話し合うような土壌が少しずつできればいいのかなと思いました。

意見

アンケートについて。支援学校には図書室がありませんでした。今の甲斐校長が必要ということで図書のコーナーを作られ、また移動図書館の巡回も始めたら子どもたちが大変喜んでいて聞いています。支援学校の高等部のアンケ

ートはあっても、高校のアンケートは、別にとった方が良いと思います。高校の学校図書館は蔵書がとても充実しています。わざわざ町の図書館に来なくても高校生向けの本がたくさんあります。この不読の数字は、高校生も踏まえて再度取り直した方が良いのかなと思います。

それから、町の図書館と小中学校図書館の役割分担をしていった方が良くと思います。入門的な本、興味を持てるような本があるというのが、学校や家庭といった身近な場所で、もっと深めてみたいと思ったときに本があるのが町の図書館という風につないでいけばもっと良いのではないかと思います。

意見

絶対的な蔵書数が違いますからね。それと、学校間での比較ということも面白いかと思います。東小校区の子どもたちは自分たちだけでは町の図書館に来ることができません。それに対し、大津小や室小校区の子どもたちは学校帰りにも来ることができます。環境が全く違いますので、町の図書館としてどういった支援ができるのか、考えると良いかと思いました。

意見

こういった本が必要というリクエストをもらって、移動図書館の巡回時に持っていくなどの工夫もあるといいかもしれません。できるだけ公平に、等しくできるようにアイデアを出していかなければならないかと思います。

意見

北海道などでは実際にそのようなことをされています。ただ、職員の数も足りないので、ボランティアが運搬などを行っているようです。

答弁

現在、おおづ図書館でも移動図書館でリクエストがあった本を持っていくことはあります。また、要望があれば必要な本を集めて公用車で持っていくこともあります。ただ、学校の先生方もお忙しいので、こちらにご要望をいただく、というところまでいかない学校もあります。今後より利用していただくためにも学校側に呼びかけて連携していきたいと思います。